

## 風を起こす &lt;第23回&gt;

一住民として地域に飛び込んで  
見つけたライフワーク

札幌市財政局工事管理室建築検査担当係長

## 加藤 美浩さん

公務員ゆえに、地域活動に参加するのは気が進まないこともあるだろう。変に期待されても困るし、面倒なことに巻き込まれたくないし…。だが、思い切って飛び込んでみれば、手に入れられるものだって多い。

## 地域住民へ情報を発信し続けて11年

〆月曜日午後4時になりました。あれこれどれどれの時間です。元気満々、週のスタートを切ったアナタ。あくまた1週間の始まりごと、もはや疲れちゃっているアナタ。いつもと変わらない日だったなあとぼんやり思っているアナタ。いろんなアナタとの夕暮れ時のホッと一息タイムです。ちよつとおしゃ

れな、おもしろまじめな58分間。よろしくお付き合いください。——毎週月曜夕方4時。札幌市東区でFMラジオを81・3MHz

に合わせると、癒し系のソフトな声で小気味よいトークが流れてくる。声の主はSWINGKATOこと加藤美浩さん。コミュニティFM「さっぽろ村ラジオ」の開局以来、パーソナリティを務めて、今年で11年目を迎える。

加藤さんの番組のテーマは「音楽とまちづくり」だが、トークのネタは「男女共同参画」や「原発」「体罰」などお堅いものから、「JAZZ BEST50」など音楽にまつわるもの、「旅行記」「お弁当のこと」など日常の出来事まで幅広い。番組タイトル「あれこれこれこれ」に込められた思いの

[かとうよしひろ]

1963年、北海道札幌市生まれ。北海道札幌工業高校を卒業後、I・M建築設計事務所を経て、1988年4月、札幌市役所に入庁。建築指導課を皮切りに交通計画課、区政課、技術管理課、都市景観課、中高層紛争調整担当課等。プライベート活動のうち現在関わっている主なものは「アマチュアバンドコミュニティさっぽろ(ABC-SAPPORO)代表」「NPO法人全国結婚・家庭未来塾 理事」「さっぽろ村ラジオ パーソナリティ」「おじさんバンドネットワーク “プレイヤーズ・プレイス” 副会長」。自费出版の著書に『まちづくりのスズメ』『川柳のスズメ』がある。妻と娘2人の4人家族。

■SWINGKATOのホームページ

<http://www.geocities.jp/swingkato/>



市営住宅1階の店舗の一部を間借りして開設されている「さっぽろ村ラジオ」のスタジオ。幹線道路の騒音が気になるところだが、経営が厳しいため贅沢は言っていない

通り、欲張りにあれもこれも何でも好奇心を持った盛りだくさんの内容となっている。「僕としては、ラジオを通して、世の中で起きていることを自分ごと置き換えるパイプ役をしているつもりなんです。社会問題や事件を、人ごとで終わらせないで、一緒に考える。僕はこうに考えていますが、リスナーの皆さんはどうですか？ ご自身の生活にとって、地域にとってどうですか？ とひたすら投げ掛けているのです」

放送日がウィークデーのため、番組は土曜日に収録。大手ラジオ局なら数人で分担するようなミキサー、タイムキーパー、ディレクターの仕事を、加藤さんはすべて1人でこなす。その日使う曲をまとめたMD1枚と簡単なメモ1枚を持ってスタジオに入ると、マイクの向こう側をイメージしながら語りかける。途中、音楽を流しながらの約1時間。最後は偉人・賢人の箴言・名言を一言引用して、締め言葉とする。

2003年から10年間ずっと1人で語り続けてきたが、今年4月からは積極的にゲストも招くことにした。

「記念すべき第1回目のゲストは86歳の私の母です。身内ネタと言われるかもしれませんが、人に歴史あり、そんなものも有りかなと」

ゲストを招いたときは、リスナーに「こんな人がいるんだ」と知ってもらおうと同時に、ゲスト自身

も人生を振り返ることで何か発見できたり考えるきっかけになればという思いでトークする。

「意識しているのは、その人となりや、いかに引き出せるか」です。その方の思いが伝わるようなお手伝いができれば、うれしいですね」

### 誰のためでもない、自分自身が楽しいから

加藤さんは高校卒業後、建築設計事務所を経て市役所に入庁した。毎日残業続きで休日出勤も当たり前だった民間零細企業の労働環境と比べて、市役所での勤務は時間に余裕があった。公務員になったのだから、余った時間は地域のために使わなければならない。——律儀にそう考えた加藤さんは、

手はじめとして地元の建築士会に入り、役所の外でもまちづくりに関わるようになった。仕事とはまた違ったソフト面でのまちづくりのおもしろさを知った加藤さんに、その後の方向付けをしてくれたのは「地域支援クラブ」のメンバーたちだった。

「今でこそ、NPO活動センターなどNPO活動を支援する中間組織の重要性も認知されていますが、地域支援クラブは、NPO法ができる以前から、中間支援組織としてさまざまな団体の地域活動を支援していた札幌市内のボランティアグループです。

彼らは、地域の課題に対して自分たちが直接活動するのではなく、サポートセンター

的にアドバイスをしたり、人材やモノ、資金情報の仲介をしていました。

私は地域支援クラブで多くのことを学ばせてもらいましたが、一番の収穫は「すべて」の活動は自分自身がやりたいからやっている」という、その姿勢でした」

ボランティアは他人への奉仕ではなく、あくまでも自分自身のために、楽しいからやっているのだ。——その心の部分に、清々しさを感じた。一市民として、自分たちの住むまちをもっとよくしていきたい。——思いを強くした加藤さんは、区役所のまちづくり市民会議に住民の一人として応募し、メンバーとなった。そこで誘われたのが、コミュニティFMをツールにまちづくりをしていこうというグループだった。

全国的に見てコミュニティFMの経営は第三セクターによるものが少なくないが、東区の市民会議ではNPO法人による開局を目指した。加藤さんはラジオについて全くの素人だったものの、NPO法人の設立についてはこれまでの活動で身につけたノウハウがあった。

メンバーたちは知恵を出し合い、奔走し、2003年、コミュニティFM「さっぽろ村ラジオ」が開局した。開局時のコンセプトは「近所の井戸端会議が、そのまま流れていくようなラジオ」。

「いまだとき、井戸端会議しませんか」と言っても、皆さんなかなか家の外に出てこないでしょ？ だから、ラジオを使って井戸端

会議をしようとしたんです。『あそこのおばあちゃん、週に1回ラジオに出てるね』みたいなことから、コミュニティションが始まる。コミュニティの再生には、まず、コミュニティションの場が必要ですから」

地域コミュニティが脆弱化する中、ラジオを使って住民も自ら発信者となり、情報を共有していく。地域への関心をうながし、コミュニティの連帯感を醸成することが、ひいては防犯や防災の機能を高めていくことにつながるのではないかと。とりわけ災害時には、コミュニティFMの真価が問われる。実際、東日本大震災でもコミュニティFMは住民にとって貴重な情報源となり、その存在感を示した。

「災害時の情報提供はコミュニティFM局の使命です。いざ災害が起こったら、たった1人でもラジオ局に駆け込んで放送できるように、関係者は放送法から機材の取り扱いまで、ひととおり身につけています」

歴史的価値のある石造りたまねぎ倉庫でスタートしたさつぼろ村ラジオは、紆余曲折を経て、現在、市営住宅1階の店舗を間借りして運営されている。

「開局当時から残っているパーソナリティはわずか3人になりました。その一人として、これからも続けていきたいですね」

一方、運営サイドからは離れ、ご意見番的にアドバイスをする程度にとどまっている。とは言っても、加藤さんが地域活動に対して消極的になつたわけではない。むしろ、

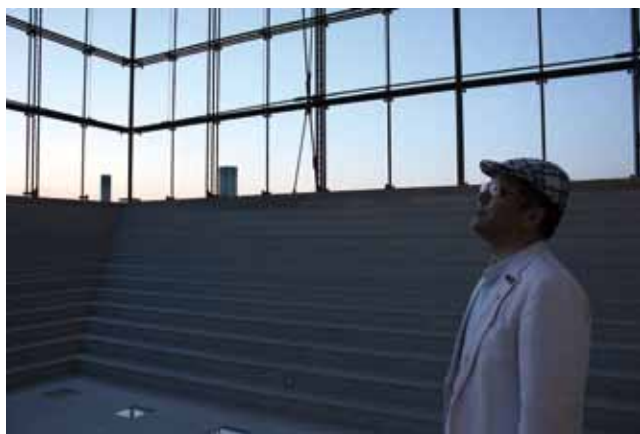
その活動は幅を広げている。

## 「僕だからできる」まちづくりと音楽の融合

プライベートの名刺を拝見すると、いくつもの肩書きが並んでいた。「アマチュアバンドコミュニティさつぼろ(ABC-SAPORO)代表」「コミュニティション講座講師」「NPO法人全国結婚・家庭未来塾理事」。肩書きがないものも含めると、さらにその数は増える。

——「アマチュアバンドコミュニティさつぼろ」というのは、どんなボランティア活動なんですか？

「『音楽をまちのチカラに』をコンセプト



「モエレ沼公園」のシンボル「ガラスのピラミッド」は夕暮れ時がロマンチック。ここを会場に毎年12月「モエレのホワイトクリスマス」が開催され、加藤さんも音楽イベントに10年前から関わっている

に、アマチュア音楽を生かしたまちづくりをしています。地域の祭りや施設のイベントで、ミュージシャンの演奏がよくありますよね。でも、毎度毎度同じ人が同じ音楽をやっている、つまらないでしょうか？ だからと言って、主催者には毎回違ったミュージシャンを呼べる人脈がない。だったらその橋渡しをしようと思って始めたのが、この活動です」

加藤さんは、ご両親の影響で中学生の頃からジャズに夢中だった。それも洋モノではなく日本のジャズ。ジャズクラリネット奏者の北村英治さんに憧れ、独学でクラリネットをマスターしたほどだ。

「趣味を尋ねられて『音楽です』と答えると、『いいご趣味ですね』と返ってくるんですよ。でも、僕は音楽をいつまでもいいご趣味ではなく、地域の文化にしたいと思った。そこで、これまで自分がやってきた『まちづくり』と『音楽』をつなげたのです」

アマチュアバンドコミュニティさつぼろを旗揚げして既に10年以上が経つ。旗揚げと言っても運営はすべて1人。『組織だつてするほどのことじゃありませんから』というのがその理由だが、登録された40グループ以上のアマチュアミュージシャンと主催者とのコーディネートに数十件もこなすなど、よほど情熱がないと続けられないだろう。

## 人との出会いが栄養源

それにしても、地方公務員として仕事で

地域と関わりながら、なぜ、プライベートでもそこまで地域に関わっていいこととできるのだろうか？

「僕はただ、一生懸命に活動している人たちに惹かれ、関わっているだけです。それぞれの思いを大切にし、人とまちをつなげていきたい。そして何より、人との出会いが僕にとつての栄養源になっていますから」

「それに…」と加藤さんは続けた。

「役所は住民に対し、協働を呼びかけ、まちづくりへの参加は大事です」と説きますが、だったら役所の人間だって一住民となったときには参加しなければ、ウソになるんじゃないかなど。僕が役所の外でも率先して地域に関わっているのは、お手本を示すという意味ではなく、蕎麦屋がうちの蕎麦はおいしいですよ、僕も食べていますよ、と言うのと同じ理由なのです」

ただし、公務員として地域活動に関わる上で、気を付けていることもある。

「制度に詳しいなど公務員が得意とすることはあります。使える知識や能力は使ったほうがいいかもしれませんが、どこまでやるか線引きは必要です。そうでなければ、本人にそのつもりがなくても、役所の人を入れておいたほうが便利だよ」と使われてしまうことになりかねません。

地域に飛び出していいこうとときに、最初から期待されるものが、便利さだと意欲をそがれてしまいますよね。公務員が便利屋になってしまうと、市民活動が自立でき

ませんし、自分自身が純粹に楽しめなくなります。公平性という観点で、周囲から誤解を招いても困ります。ですから、大切なのは一住民の立場で関わるということです」

もう一つ意識しているのは「仕事も人一倍やる」ということ。職場で、あいつ、アフターファイブの活動が忙しいから、仕事の手を抜いているよね」と陰口を叩かれれば、せつかくの地域活動が台無しになってしまふ。だから、仕事にも全力投球。一住民の目線で見えておかしいと思えば、既成概念にとらわれず、改善に向けて動く。都市景観担当やマンション紛争担当になったときには、20年近くも手が着けられていなかった運用基準や業務マニュアルを大幅に改善した。「20年も経ったら世の中だいぶ変わっていますよね。役所やルールも、時代やニーズに合わせて変えていかないと」

仕事でもプライベートでもアクセス全開だが、それが相互作用と相乗効果をもたらしている。仕事の疲れはプライベートの活動で忘れ、プライベートでの疲れは仕事で吹き飛ばす。

### 実は愛妻家の「札幌の川柳おじさん」

さらに、加藤さんにはもう一つの顔がある。HBC北海道放送で紹介された言葉を借りれば「札幌の川柳おじさん」。

仕分け人 妻に比べりゃ また甘い  
この川柳を記憶の方もいらっしやるのではないだろうか。「サラ川」として今やすっ

かりお馴染みとなった第一生命保険「サラリーマン川柳コンクール」の第23回で、みごと第1位に輝いた作品だ。この詠み人が誰あろう、加藤さんである。

川柳を始めたきっかけは「楽しそう、これならできそう」だったから。2005年、初出品ながら「枕より わが子に欲しい 低反発」で第41位に選ばれ、以来、連続して入選した。サラ川以外にもさまざまな企業の川柳コンクールに応募するため、年に100句以上は創る。

「もともと言葉遊びが大好きなんです。我流で創っていますが、それはそれで楽しいし、入賞すれば賞品もいただけます」

川柳を創るのは決まって土日の早朝。まだ誰も起きていない静かな時間に、五七五をひねることがストレス解消になる。早朝のゴールデンタイムにコミュニケーションで流す曲を1枚のMDにまとめ、地域活動の雑務をこなす。午前8時にはすべてが終わり、あとは家族との時間を存分に楽しむ。

「2人の娘が小さい頃は家族4人で過ごしましたが、いまは夫婦2人で過ごす時間のほうが多いかな」

結婚記念日には毎年忘れず花束を贈るほどの愛妻家。川柳のイメージとは真逆である。仕事、地域活動、趣味、家族との時間……あれもこれも満足させるには、かなりの気力、体力がいるが、出し惜しみはしない。そのすべてが、加藤さんにとっては大切な生きがいなのだから。(ライター/更田沙良)